



京大広報

No. 552

2000.12

目次

大学の動き

平成12年度日本語・日本文化

研修留学生の受入れ972

厚生補導（SPS）担当教官研究会の開催972

平成13年度大学入学者選抜

大学入試センター試験の実施973

日誌973

栄誉

河合隼雄名誉教授，石井米雄名誉教授，本庶 佑

医学研究科教授が文化功労者に選ばれる974

加藤尚武文学研究科教授，新庄輝也

化学研究所教授が紫綬褒章を受章976

訃報977

紹介

土木百周年記念資料室979

随想

携帯世代のライフスタイル

名誉教授 川崎辰夫980

資料

平成12年度京都大学市民講座講演要旨981

平成12年度教育改善推進費

（学長裁量経費）による研究課題984

話題

総合人間学部正門ほか3棟が文化財に登録987

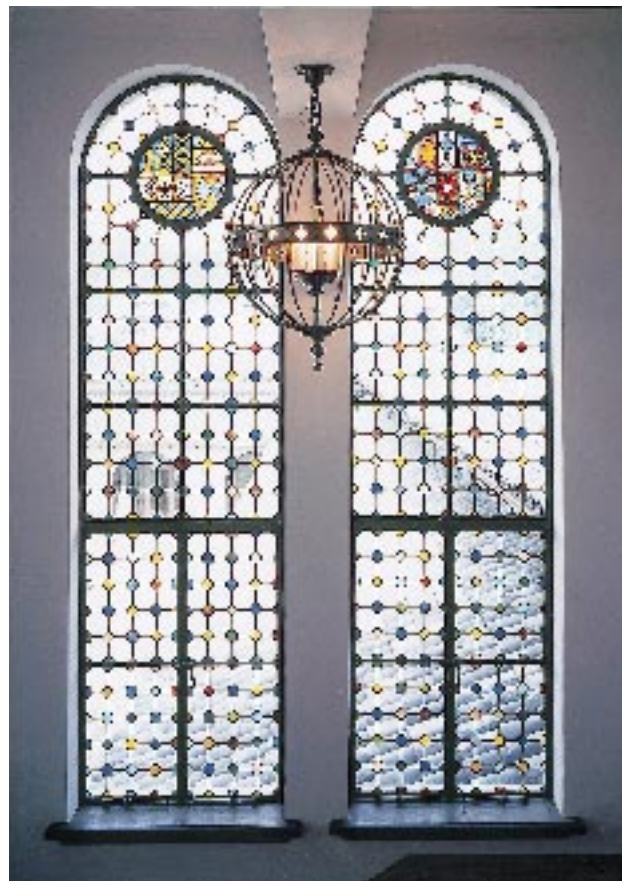
公開シンポジウム

「トラウマと心のケア」の開催989

お知らせ

「白馬山の家」の冬季開設989

学生証のIDカード化について990



人文科学研究所附属漢字情報研究センター
（ステンドグラス）

関連記事本文987ページ

大学の動き

平成12年度日本語・日本文化研修留学生の受入れ

昭和57年度から、本学では「日本語・日本文化研修留学生制度」(京大広報 No. 240)による留学生を受入れているが、平成12年度は11カ国から19人を受入れることになり、10月16日(月)京大会館において三好郁朗留学生センター長はじめ関係教職員の

出席のもと開講式が行われた。

また、平成11年度の留学生15人に対する修了式が9月5日(火)京大会館において開催され、修了証明書が授与された。

本年度の研修の概要は、次のとおりである。

日本語・日本文化研修留学生に対する教育課程、授業計画及び授業時間数

区分	授業科目	授業時間数		
		第一期 (10月～3月) 時間	第二期 (4月～9月) 時間	計 時間
〔Ⅰ〕 総合	日本語・日本文化ゼミナール		60	60
〔Ⅱ〕 日本 事情	① 日本事情(A)	32	26	58
	(ア)日本の社会に関する概説	(10)		(10)
	(イ)日本の法と政治に関する概説	(12)		(12)
	(ウ)日本の経済に関する概説	(10)		(10)
	(エ)各分野の諸問題		(26)	(26)
② 日本事情(B)	(ア)日本文学	50	42	92
	(イ)日本文化・歴史(風土を含む)	(20)	(22)	(42)
	小計	(30)	(20)	(50)
	小計	82	68	150
〔Ⅲ〕 特別 教育	① 現代産業及び現代文化に関する 参観・研修等	60		60
	② 伝統産業及び伝統文化に関する 見学等		60	60
	③ 特別講義		30	30
	小計	60	90	150
〔Ⅳ〕 日本語	① 日本語概説	60	60	120
	② 日本語強化コース	240	80	320
	小計	300	140	440
合 計		442	358	800

厚生補導(S P S)担当教官研究会の開催

学生部では、毎年学生の厚生補導(S P S : Student Personnel Services)に関する諸問題を討議・研究するため厚生補導担当教官研究会を開催している。今年度は10月28日(土)～29日(日)に箕面市のホテルにおいて長尾 真総長、宮崎 昭副学長、学生部委員、学生部職員等37人並びに講師とし

て加藤幹太滋賀大学長の出席を得て開催された。

加藤滋賀大学長から、学長としてまた元本学学生部長としての豊富な経験に基づいた「今と昔」と題して学生の気質についての講演があった。その後、大学における学生生活の充実方策等について活発な討論が交わされ、学生部・学生部委員会を中心に学

生関係施設の整備を要望することになった。

これに先立ち、大阪大学の課外活動施設等を見学し、同大学三浦永司学生部長から福利厚生施設並び

に課外活動施設の現状の説明を受けた後、本学学生部委員と意見交換を行った。

平成13年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施

平成13年度大学入学者選抜大学入試センター試験は、平成13年1月20日（土）及び21日（日）の両日に実施される。

このため、本学では1月19日（金）の授業を休止する。

試験の概要は、次のとおりである。

1. 期日及び試験教科

1月20日（土）

外国語，地理歴史，数学①，数学②

1月21日（日）

国語，理科①，理科②，公民

2. 試験場及び受験者数

農学部試験場（北部構内）

法学部・経済学部試験場（本部構内）

工学部試験場（本部構内）

総合人間学部試験場（総合人間学部構内）

医学部試験場（南部構内）

薬学部試験場（南部構内）

関西文理学院試験場

受験者数 7,013人

日誌 2000.10.1 ~ 10.31

10月6日 ドイツ連邦共和国 大学長・事務総長日本視察団（Kurt KUTZLER ベルリン工科大学第一副学長他19名）来学，総長及び関係教官と懇談

10日 評議会

” 将来構想検討委員会

” 京都大学春秋講義（秋季講座）月曜講義（以後16日，23日，30日，11月6日開催）

” Olle EDQVIST スウェーデン基盤戦略研究財団理事他1名来学，総長及び関係教官と懇談

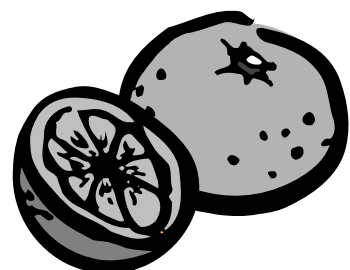
11日 京都大学春秋講義（秋季講座）水曜講義（以後18日，25日，11月1日，8日開催）

17日 環境保全委員会

18日 国際交流委員会

21日 京都大学市民講座（以後28日開催）

27日 附属図書館商議会



荣誉

河合隼雄名誉教授,石井米雄名誉教授,本庶 佑医学研究科教授が文化功労者に選ばれる

河合隼雄名誉教授,石井米雄名誉教授,本庶 佑医学研究科教授が平成12年度文化功労者に選ばれました。以下に各氏の略歴,業績等を紹介いたします。

河合隼雄名誉教授は,昭和27年京都大学理学部数学科を卒業後,本学大学院(文学部),カリフォルニア大学大学院を経て,同37年天理大学助教授となり,スイス国チューリッヒ・ユング研究所に留学,同40年日本初のユング派分析家の資格をとって帰国された。昭和44年天理大学教授,同47年京都大学教育学部助教授,同50年同教授に就任,臨床心理学講座を担当された。平成2年国際日本文化研究センター教授に配置換となり,同時に本学教育学部教授を併任,同4年併任期間終了により,京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間,昭和55年から同58年まで教育学部長,同62年から平成元年まで学生部長を務められた。平成7年国際日本文化研究センター所長に就任,現在に至っている。

同名誉教授は,我が国の臨床心理学および心理臨床学の発展,なかでもユング派心理療法や箱庭療法の普及に尽力された。この分野の著書には『ユング心理学入門』『影の現象学』『心理療法論考』『臨床教育学入門』などがある。同名誉教授はまた日本心理臨床学会や日本箱庭療法学会の創設に関わり,理事長を歴任し,日本の臨床心理学の第一人者となられた。平成元年には日本臨床心理士資格認定協会の



創設に関わり,臨床心理士の初代会長となられた。

また同名誉教授は,学術審議会委員,保健体育審議会臨時委員,宗教法人審議会委員,中央教育審議会委員,「21世紀日本の構想」懇談会座長などを歴任され,同12年3月より,教育改革国民会議委員を務めておられる。

同名誉教授は,上記の業績により平成4年日本心理臨床学会賞,同12年日本箱庭療法学会賞を授与され,また『母性社会日本の病理』『中空構造日本の深層』『明恵夢を生きる』『子供と悪』『日本人の心のゆくえ』など幾多の書物を著し,昭和57年大仏次郎賞,同63年新潮学芸賞,平成7年紫綬褒章,同8年日本放送協会放送文化賞,同10年朝日賞などを授与された。

同名誉教授の活躍は,海外にも及び,国際箱庭療法学会理事長を務められるとともに,スイスのアソコーナでのエラノス賢人会議にも再三招聘され,またプリンストン大学の客員教授も務められた。

以上のような我が国における臨床心理学,臨床教育学,日本学などの斯界をリードする輝かしい業績と国際的な幾多の功績が評価され,本年度の文化功労者として顕彰されたことは,ご同慶にたえない。

(大学院教育学研究科)

石井米雄名誉教授は,昭和30年東京外国語大学シャム語学科を退学して外務省に入省,同40年京都大学東南アジア研究センター助教授,同42年同センター教授に就任し,社会構造研究部門を担当された。平成2年退官され,京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間,昭和60年から平成2年まで東南アジア研究センター所長,昭和61年から平成2年まで文部省学術国際局科学官を歴任さ



れた。本学退官後は,上智大学外国語学部教授に就任,平成4年から同7年まで同大学アジア文化研究所長を務められた。平成9年神田外語大学長に就任され,現在に至っている。また,その間,東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センター所長,日本学術振興会学術顧問,文部省ユネスコ国内委員会会長を歴任されている。

同名誉教授は,永年にわたりタイをはじめとする東南アジア上座仏教研究,日本とタイの関係史,同地域の法制史さらに東南アジアの歴史研究一般の分

野で、従来利用が困難であった現地語資料をも駆使しつつ、地域研究の手法と洞察に裏付けられた成果を国内外に発表し、国際的に高く評価されている。例えば上座仏教研究は英語、マレーシア語にも翻訳されて国際学界に影響を与え、タイ古代法典研究はタイ研究のみならず、比較法制史の研究分野にも多大なる貢献をなした。また、内外の東南アジア関係の事典、入門書の編集・監修にあたり日本での東南アジア地域研究を一般に定着させた。昭和61年から同62年まで東南アジア史学会長、国際アジア歴史学者会議においても同63年から平成3年まで副会長、引き続き同6年まで会長を務められ、日本の東南ア

ジア地域研究が国際的に先導的な役割を果たして行く基礎を築かれた。

これらの業績に対し、同名誉教授は昭和62年第3回大平正芳記念賞並びにタイ王国三等白象勲章、平成6年に第5回福岡アジア文化賞（学術研究賞・国内部門）、平成7年紫綬褒章を授与されている。

先駆的な研究業績、国内外における学術振興、さらにその高い人格と識見をもって大学・学界の発展並びに人材の育成、国際交流の発展に大きく寄与した貢献と実績が評価され、このたび文化功労者として顕彰されたことは、誠に喜ばしいことである。

（東南アジア研究センター）

本庶 佑教授は、昭和41年京都大学医学部医学科を卒業、東京大学医学部助手、大阪大学医学部教授を経て、同59年より京都大学医学部教授に就任、医化学第一講座を担当された。平成7年医学研究科教授に配置換となり、分子生体統御学講座分子生物学分野を担当され、現在に至っている。この間、平成8年から4年間医学研究科長・医学部長を務められた。



同教授は、多年にわたり、免疫学の研究・教育に努め、分子免疫学研究の幕開けとその後の研究展開において国際的に先導的な役割を果たしている。生体を防御する免疫系において、抗体の多様性がどのような仕組みによって生ずるのか、多様な抗体の産生に至る免疫細胞の分化、増殖はいかなる仕組みによるのか等の免疫学の中心的な課題に取り組み、それらの仕組みを世界に先駆けて明らかにされた。特に、抗体産生におけるクラス変換が抗体H鎖遺伝子の欠失を伴う特殊な反復配列を介した遺伝子組換えによって起こるというモデルを提唱し、自ら実証したことは免疫学における画期的な成果である。また、世界に先駆けてクラス変換の制御や免疫細胞の分化、増殖を制御するサイトカインIL-4及びIL-5の単離と機能の解析に成功した。さらにRNA情報編集酵素AIDを単離し、これがクラス変換と体細胞突然変異の両者に不可欠であることを発見して、免

疫系の多様化機構の解明に新たな突破口を開かれた。また、ヒト遺伝性免疫不全症の原因遺伝子がAIDであることを証明し、臨床医学的にも極めて重要な事実を明らかにされた。これらの成果は医学、生物学の多くの研究分野の発展にも多大な影響を与えているものである。

これらの業績に対し、昭和56年野口英世記念医学賞、同57年朝日賞、同59年日本遺伝学会木原賞、同60年ベルツ賞、同63年武田医学賞、平成4年ベリング北里賞、同6年上原賞、同8年恩賜賞・日本学士院賞を授与され、昭和63年米国免疫学会名誉会員、平成3年フォガティースカラー（NIH）にも選出されている。

以上のような研究業績と学術発展への指導的活動が評価され、このたび文化功労者として顕彰されたことは、誠に喜ばしいことである。

（大学院医学研究科）



加藤尚武文学研究科教授，新庄輝也化学研究所教授が紫綬褒章を受章

我が国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより，加藤尚武文学研究科教授，新庄輝也化学研究所教授が，平成12年11月3日に紫綬褒章を受章されました。

以下に両教授の略歴，業績等を紹介します。

加藤尚武教授は，昭和38年東京大学文学部哲学科を卒業，同41年同大学院人文科学研究科修士課程修了，同大学院博士課程を経て，同43年同大学文学部助手，同44年山形大学教養部講師，同45年同大学助教授，同47年東北大学文学部助教授，同57年千葉大学文学部教授に就任し，哲学・倫理学講座を担任された。平成6年京都大学文学部教授となり，倫理学講座を担任，同8年同大学院文学研究科教授に配置換となり，哲学・宗教学講座を担任され，現在に至っている。

同教授は，長年にわたって哲学・倫理学の領域，特にヘーゲル哲学を主軸とするドイツ観念論研究，および生命倫理学，環境倫理学を中心とした応用倫理学研究において画期的な論稿を数多く発表し，日本における哲学・倫理学研究の発展に貢献されている。

同教授の代表的なヘーゲル研究としては，『ヘーゲル哲学の形成と原理』の中で，厳密な文献学的手法に立脚しつつ，ヘーゲル独自の思想形成の大きな要因として青年期の自然主義的共和主義の重要性を明確にした研究業績がある。この実績により，同教授は第7回哲学奨励山崎賞を受けられた。『哲学の使命』においては，ヘーゲル哲学の基本的主張として，人間精神のあらゆる領域に非等質性にまたがる同一性を発見するという点に着目し，そこからヘー



ゲル哲学を再評価した点において同書は高い評価を得，これにより第6回和辻哲郎文化賞を受けられた。また同教授は，日本における応用倫理学研究の基盤を構築してきた点でも大きな功績があり，国内での生命倫理学研究の嚆矢ともいえるべき『バイオエシックスとは何か』を始めとして，『環境倫理学のすすめ』，『応用倫理学のすすめ』，『現代を読み解く倫理学』などの著作群は，欧米の応用倫理学をいち早く日本に紹介するのみならず，独自の批判的観点から応用倫理学のあるべき姿を提示したものとして現在も広範な影響を与え続けている。この領域における著作のいくつかは，すでに中国語ならびに韓国語に翻訳されている。

学界においては，日本哲学会，日本倫理学会を始めとする全国学会の委員，評議委員を長年にわたってつとめ，とりわけ平成11年度よりは，日本哲学会委員長の重責を果たしている。また，国民生活審議会臨時委員，地球環境保全型産業社会確立調査委員会委員長，並びに科学技術庁資源調査会，原子力委員会，厚生科学審議会，科学技術会議，文部省学術審議会などの専門委員を歴任し，学術，文化行政にも尽力している。

こうした同教授の長年にわたる業績に対して，この度，紫綬褒章を受章されたことは，誠に喜ばしいことである。

(大学院文学研究科)

新庄輝也教授は，昭和36年京都大学理学部化学科を卒業，同41年同大学院理学研究科博士課程を修了後，京都大学化学研究所助手，同助教授を経て，同57年同教授に就任，新機能材料部



門を担任，平成2年同研究所の改組により無機素材化学部門を担任され，現在に至っている。この間，平成8年から2年間化学研究所長を務められた。

同教授は，金属強磁性体の形状を薄膜化，微細化することにより多様な物性，機能性が出現することを示し，磁性金属膜に関係する多くの研究領域を開

拓された。強磁性金属の表面・界面磁性の研究では、超高真空蒸着法による磁性膜作製と、鉄メスバウア分光法を巧みに組み合わせて、種々の物質と接した鉄の磁性状態を原子層の分解能で明らかにされた。続いて、二種類以上の金属が数ナノメートルの膜厚で交互に積層した金属人工格子を合成し、その磁気物性を研究した。パーマロイ/銅/コバルト/銅金属人工格子における非結合型巨大磁気抵抗効果の発見は、磁性と伝導性の絡み合いという基礎研究として重要であるだけでなく、高性能な磁気ヘッドデバイスの開発へと発展した。磁性細線や磁性ドットなどのナノスケール磁性体の研究は今まさに発展中であるが、同教授は、特定のサイズの磁性ドットが特異な磁化配列構造をとることを発見するなどの成果をあげている。

これらの業績に対して、平成2年および同10年に

日本応用磁気学会論文賞、同5年に日本応用物理学会賞（会誌賞）、同9年に日本応用磁気学会賞などが授与されている。

同教授は、International Board on the Application of the Mössbauer Effectの日本委員、International Colloquium on Magnetic Films and Surfacesの国際運営委員会委員長などを務め、メスバウア分光法や磁性膜・表面研究の国際的な発展に尽力している。また、文部省学術国際局科学官、同学術審議会専門委員、日本学術振興会茅基金運営委員会委員などの任にあたり日本の学術研究の発展にも貢献されている。

以上のような業績に対し、この度、紫綬褒章を受章されたことは、誠に喜ばしいことである。

（化学研究所）

訃報

このたび、^{あおき けいじ}青木啓治名誉教授、^{にしむら はじめ}西村孟名誉教授、^{むらかみ まさし}村上仁名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

青木 啓治 名誉教授



青木啓治先生は、10月10日逝去された。享年74。

先生は、昭和26年京都大学文学部英文科を卒業、同年浪速大学（現大阪府立大学）助手として勤務し、同大学助教授を経て、同44年京都大学教養部助教授、同49年同教授に就任、英語を担当された。平成2年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、平成2年から同9年まで桃山学院大学教授を務められた。

先生は、シェイクスピア研究で多くの研究業績を残された。特にシェイクスピアの歴史劇における研究では、劇中の主人公の性格と主題とが密接に関連

づけられたものであるという視点から、シェイクスピア研究に独創的な展開をもたらした。代表論文には、「『ヘンリー四世』と『ヘンリー五世』を結ぶもの ハルの英雄的性格と太陽と雲の主題」がある。

（総合人間学部）



西村 孟 名誉教授

西村 孟先生は、10月28日逝去された。享年73。

先生は、昭和24年京都大学理学部物理学科を卒業後、同大学大学院で数学を専攻され、同大学理学部副手、同助手、同大学教養部講師、助教授を経て、同43年同教授に就任、数学を担当された。昭和59年工学部教授に配置換となり、工業数学講座を担当された。平成2年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、評議員、教養部長を務められ、大学の管理運営に貢献された。

また、中華人民共和国大連外国語学院にて、派遣留学生のために数学の講義を行うなど、国際交流にも貢献された。

本学退官後は、平成2年から同4年まで、富山県立大学工学部教授を務められた。

先生は、数学特に代数学の分野において、微分代数、クルル環の研究等で優れた研究業績を残された。先生は物理学科出身の数学者として数学の応用、特に工学理論の代数化（ソフト化）に強い関心を示され、若い工学者に代数学の真髄を説き続けられた。代数学研究と豊富な教育経験の中から生まれた『代数』は世評の高い著作である。

(大学院工学研究科)

村上 仁 名誉教授

村上 仁先生は、11月1日逝去された。享年90。

先生は、昭和8年京都帝国大学医学部医学科を卒業、同大学医学部助手、講師、助教授、同26年名古屋市立大学医学部教授、同30年京都大学医学部教授に就任、精神医学講座を担当された。昭和48年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和48年から同57年まで兵庫医科

大学教授を務められた。

先生は、精神医学なかでも精神病理学に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に貢献された。主な著書に『精神分裂病の心理』、『異常心理学』等がある。

また、日本精神病理・精神療法学会、日本精神神経学会、日本児童精神医学会などにおいて、会長、理事長等の要職を歴任された。

これら一連の功績により、昭和57年4月勲三等旭日中綬賞を受けられた。

(大学院医学研究科)

紹介

土木百周年記念資料室

京大の建物の中でも最も古いとされる赤煉瓦の土木教室旧館の1階西奥の一角に、土木百周年記念資料室がある。この資料室は平成9年に土木教室創立100年を記念して、土木百周年記念資料室運営委員会のもとに企画され、同年6月に開設されたものである。

この資料室は、大学における教育・研究の一環として、土木遺産の研究調査、収集、保存、展示を行い、これらを通じて土木の学問的伝統の継承と発展に努め、情操の涵養に資するとともに、併せて教育・研究と社会教育に寄与することを目的としている。

当初、教室に保存されている明治期からの教育研究資料や実験模型などの整理を行い、また2年間にわたり卒業生に呼びかけて、幅広く資料収集に努めた。資料室にはその一部を展示しているが、その概要はつぎのようなものである。

最も古い資料は、明治の創設期のものである。土木工学教室は、明治30(1897)年の京都帝国大学の開学と共に設置され、創設期には、橋梁、鉄道、衛生、河海工学、構造強弱学の講座からスタートした。当時の学生数は18名であった。残されている当時の卒業論文・設計は、英文で大変興味深いものである。それらは、鉄道をはじめ、橋梁、上水道、港湾整備などの社会資本(インフラストラクチャ)の実際の計画や設計と結びついた内容である。コンピュー

ターの無い時代ではあるが、構造計算、施工、積算なども含めた実践的かつ豊富な内容となっている。これらの研究成果の多くは実際に施設の完成にまで結びついたと言われ、当時の教育研究が明治の復興期を支えた証として、土木史的にも価値の高い資料である。例として、井上秀二氏(松島港)、杉村博通氏(四条大橋)の論文、設計図面が展示されている。

創設期に迎えられた田辺朔郎教授は、当時最長2,436メートルのトンネルを日本人の手で初めて完成させ、琵琶湖疏水事業を完成に導いた高名な技術者であった。さらに、工事途中で水力発電の優位性を見抜き、世界でも黎明期に指折りの蹴上発電所を建設している。これらの琵琶湖疏水に関する資料については、琵琶湖疏水亀山天皇御陵前棧橋設計図、琵琶湖疏水工事図譜(明治24年)を展示している。

また、創設期から現在までの教育の軌跡を伺い知る資料として、実験模型、教科書、講義ノートなどの資料がある。教育目的と実践的な検証に用いられた模型は、現在、橋梁、水門、掘削機、鉄道などが保存されている。展示室には、その一部として、鴨緑江鉄道橋、関門トンネル掘削機などが展示されている。教科書については、土木図書室にそのほとんどが保管されており、ここには一部を展示している。併せて手書きの講義ノートも興味深い展示内容となっている。

その他、内外の研究動向を知る資料として、帝国鉄道協会会報(明治後期)、アメリカ土木学会誌、日本土木学会誌、工務局業務資料(大正初期)などの展示もある。これらの資料は欧米の技術水準に到達するまでの研究進度の経緯を物語っている。

最後に、卒業生の多くから、建物や教室、学生や教官を被写体とする研究生活に関する多くの写真が寄せ集められた。これらを見ると、人と教室の風景の変遷を垣間見ることができる。

なお、展示室は寄託資料の保存目的から常時には一般開放していないので、見学を希望される方は、土木百周年記念資料室運営委員会(地球系事務室 電話753-4785)まで申請されたい。

(大学院工学研究科)



随想

携帯世代のライフスタイル

名誉教授 川崎辰夫

若者の間では、インターネットへの接続は、いまや携帯電話（以下「携帯」という。）による方がパソコンよりも多くなったという。インターネット利用者の半数は携帯からだと聞く。



UNIX上でモザイクを使ってアクセスしたのがわずか数年前であったかと思うと、隔世の感がある。わずか3センチか4センチの画面上に親指一本でメールを書いている光景は、たしかに我々の世代ではない。私もインターネットに接続可能な携帯をようやく手に入れたが、メールは読むだけで勘弁して貰いたい。ホームページもニュース以外はほとんど見たことはない。いつでもどこでも、即時に双方向に、情報交換できるツールの出現は、モバイルを重いなど思いながら鞆に入れている我々世代とは、一つ突き抜けた環境にあると認めざるを得ない。

ある講義の時、「トイレに行きたい」という申し出があった。本来講義中にトイレへ行かなくて済むように心がけるべきだ、と教えられた我々からすると、特別のことがない限りあまり良いマナーではないと思うのだが、いまどき珍しく行儀の良い学生だなと、思っていると、30分ぐらいしてまた「トイレ」という。腹具合の悪いのは誰しもあること、「どうぞ」といった。ところが実は携帯に電話が入り、話すために外へ出ただけで、後でわかった。彼には、また戻ってくるほど重要な講義だったのだろうか？

歩きながら長々と電話する振る舞いを、電話は用件のみとしつけられた世代は、行儀が悪いマナーが出来ていない、と言いがちだが、そのような人種が出現したことは、進歩や退歩とは次元を異にする新しい世界を予感させる。彼らの人づきあいは携帯に始まる。顔は見えなくても声だけの関係にさほど不満を感じない。先に述べた「いつでもどこでも」が保証されているからである。その点ではモバイルも敵わない。

新入生の9割以上が携帯所持者だという。人間関係とは、顔の見えるところから始まると思うのは古

い世代だけらしい。顔が見えないからこそ、気兼ねなく話が出来るという関係を、彼らは享受しているといえる。インターネットによるメール交換に到ると、わずか3センチ角の窓を通じてのみ知り合い、本当に顔の知らない関係が当たり前となり、性別さえ不確かになりかねない。場合によっては、携帯を持っていたから交際のきっかけ（出会い）が出来たという情景が、不思議ではなくなった時代に生きているともいえる。情報のネットワークのみで支えられ、結びつけられ、いつでも切れそうな淡い人間関係が社会を覆う時代がそこまでやってきている。ある人はこの関係を“薄口の間人関係”と名付けている。濃口の醤油が嫌われる京都人には、ぴったりの風景かもしれない。

このような仮想空間（場）と上手につきあえる場合はよいのだが、夢か現か幻か、自己の居場所をはっきり意識しない生き方が増えて行く傾向にある。実時間を共有しない（声だけ、メールだけの）交流が占める割合が増えつつある。テレビゲームなどを通じて、小さい頃より仮想空間の事象にはまり込み慣れ親しんだ者にとっては、いずれが主でも従でもかまわないのかもしれない。現実と仮想の境界など不分明なままに生きることが出来ればそれでよいと考える人間が現れても不思議ではない。技術の進歩とライフスタイルの相互関係には、いつの時代にも少なからぬ齟齬が生じてきたものだから。

IT革命が、人の生き様と人間関係を明らかに変えつつあることを、否変えなければ対応できなくなっていることを、どれだけ意識して教育現場に生かすかは、もはや我々の世代が担う責務ではなくなった、と思わざるを得ないのであろうか。

（かわさき たつお 元総合人間学部教授

平成7年退官、専門は情報処理）

資料

平成12年度京都大学市民講座講演要旨

本年度の京都大学市民講座は、「さぐる」を共通テーマとして、10月21日及び28日の土曜日の午後、2回にわたり法経第4教室において開講した。

講義科目と講師は次のとおりであった。

地域自立の途をさぐる		経済研究科教授	岡田 知弘
意識のミステリーをさぐる	脳と心の認知科学	文学研究科教授	芋阪 直行
生命の設計図をさぐる		化学研究所教授	金久 實
チンパンジーのころをさぐる	母子のきずなと赤ちゃんの発達	霊長類研究所助教授	友永 雅己

なお、講演要旨を以下に掲載する。



地域自立の途をさぐる

経済学研究科教授 岡田 知弘

バブル崩壊後の大不況のなかで、大都市部、農村部を問わず、住民の生活の基盤となる地域産業が厳しい状況におかれています。それともなって全国各地で、地域の自立をめざす「まちづくり」や「むらづくり」のとりくみが活発になってきています。では、経済のグローバル化がすすむなかで、どのように地域を再生すればよいのでしょうか。それをさぐるためには、まず最初に、地域産業がなぜ苦境に陥っているかを検討する必要があります。そのうえで、先進的なとりくみの事例分析を行いながら、あるべき方向性を探究していきたいと思えます。

結論を先取りしていえば、現在の不況を生みだし、深化・長期化させているのは、バブル景気以来の大企業の海外への生産シフトにともなう国内産業の空

洞化であり、規制緩和と経済構造改革による中小商業、農業の衰退であるといえます。後者は、自動車や家電などの少数の大企業が引き起こした日米貿易摩擦を回避するために、中小企業製品や農産物の輸入が促進されたり、大店法が規制緩和された結果、苦境に立たされました。「資本活動の国際化」と「政策の国際化」という二重の国際化が、このような事態をもたらしているといえます。

したがって、地域の自立を考える場合、この二重の国際化への対応、すなわち資本の自由な移動への規制と、政策の国際化の見直しが必要となります。もっとも、国の政策を変えればすべてうまくいくわけではありません。また、政策が変わるまで待ちつづけることもできません。多くの地域の産業は、そ

れほど切迫した状態におかれています。したがって、地域産業の担い手である住民、あるいは地方自治体自らが、地域産業の再構築の運動をおこなうことが必然的に求められることとなります。その際、国境を越えて自由に移動する多国籍企業ではなく、地域住民の生活の支え手として、地域に根づいた中小企業や業者、農家、協同組合の存在が否応なくクローズアップされてきています。

現に、日本の各地で、彼らが主体となって「まちづくり」や「むらづくり」が展開されつつあります。そこでは、大企業がグローバル化のなかで従来の下請構造、分業構造を解体しつつあるのとは対照的に、地域にある物的・人的資源、経営資源を見直し、相

互にネットワークを張り直して地域産業の自覚的再形成が行われています。

先進的な事例から明らかになることは、経済のグローバル化のなかで、住民がそれぞれの地域で生活し続けるには、何よりも住民生活を支える地域産業の再生が必要であるということです。その場合、地域内に繰り返し投資を続けうる経済主体の形成（地域内再投資力の形成）と、地域内における産業ネットワーク（地域内産業連関）や、消費者とのネットワークの形成が鍵となっています。さらに、これを成し遂げるには、住民自身がこれらの取り組みに積極的に関与する地域住民主権の発揮が必要不可欠であるといえます。（10月21日講演）

意識のミステリーをさぐる 脳と心の認知科学

文学研究科教授 苧 阪 直 行

「意識する」とか「意識がない」といった表現を私たちは日常的に使います。しかし、私たちは意識が何であるかを本当に知ってこの言葉を使っているのでしょうか？中世の神学者アウグスチヌスは「時間とは何かと誰にも尋ねられなければ知っている、けれども説明しようとするとは何だかわからなくなる」と言いました。時代は下って、20世紀初頭に「時間」を「意識」に置きかえて「意識とは何かと誰にも尋ねられなければ知っている、けれども説明しようとするとは何だかわからなくなる」と冗談まじりに言ったのはアメリカの心理学者ウイリアム・ジェームズでした。彼は意識の本質を絶え間のない流動性にあると考え「意識の流れ」を提唱した近代意識研究の父でもあります。ユーモアまじりに言ったともとれるのですが、これがユーモアでないところに意識を考える楽しさと難しさが、そしてミステリーがあります。このミステリーを脳をキーワードとして科学的に解明する試みを紹介したいと思います。古代のギリシアやインドの哲学者、さらに近世のデカルトなどの多くの哲学者による心身問題についての論争も意識のミステリーと深くかかわっています。この市民講座では意識を哲学からではなく（とはいっても哲学を視野に入れながら）、生物学的な見方から考えてみたいと思います。つまり、「脳と心」の問題を認知

科学的アプローチから見てみようということです。

さて、19世紀中葉に実験心理学が誕生し、意識あるいは心のはたらきを実験的に明らかにしようという試みがこの1世紀半にわたりなされてきました。その結果、意識のミステリーがごく最近になって少しずつ解かれるようになってきました。その背景には新たな科学のルネサンスのはじまりがあります。工夫された心理学の実験と機能的脳画像法（fMRI）と呼ばれる新テクノロジーを融合させた新たな学問領域である「意識科学」の誕生です。意識のはたらきには階層性があり、広く外界を構成的に認識すること、言語によって過去から未来にわたる記憶を構成すること、さらに高次な自己を認識すること（自己意識）などとも深くかかわることが明らかになってきました。脳と心のミステリーは、考えたり悩んだりする意識のはたらきを担う脳を直接画像化し観察することによって少しずつ解明されつつあります。

この講座では、我々の研究成果もまじえながら、意識のミステリーを脳のはたらき、とくにワーキングメモリと呼ばれる記憶を手がかりにさぐってゆきたいと思います。そして、なぜ意識のミステリーを解くことが21世紀の生物科学全体の大きな課題となるのかについて考えてみたいと思います。

（10月21日講演）

生命の設計図をさぐる

化学研究所教授 金 久 實

私は8年前にこの市民講座で「遺伝子のかたちとはたらき」と題した話をさせていただきました。当時はヒトのすべての遺伝子を解読するヒトゲノム計画が始まったばかりの頃でしたが、この8年間に生命科学は飛躍的な進歩をとげ、今年の6月29日に米国大統領と英国首相が衛星を通して共同発表を行ったように、ヒトゲノムの概略が明らかになりました。ゲノム (genome)、すなわち遺伝子 (gene) の集まり (-ome) は、生命の設計図だと言われています。それではヒトの設計図は本当にもう大体分かってしまったのでしょうか。

確かにゲノムには生命の基本部品であるタンパク質の作り方が書かれています。そして2人のゲノムの情報を比較すると、部品のレベルでは99.9%同じであると言われています。ですからあとの0.1%で人種の違い、個人の違い、あるいは性格の違いといったことがすべて説明できなければなりません。これはとても不可能なことに思えます。同じ種類のレゴのブロックから組み合わせ方でいろいろなものが作れるように、同じ部品から異なる生命ができていても不思議ではありません。つまり部品をどのように組み合わせるか、その配線図の情報がなければ、生命の設計図が分かったことにはならないのです。では配線図の情報はどこに書かれているのでしょうか。

生命は細胞からできています。その中にゲノムが

あるわけで、ゲノムをとりかえればクローンができると思われているように、一般にはゲノムに生命の基本プログラムがあって、まわりは単なる環境とみなされています。一方で、あらゆる生物の個体はゲノムだけから出発しているわけではありません。必ず親の生殖細胞から出発しています。我々一人一人も母親の卵細胞から出発しています。すなわち、あらゆる生命には生殖細胞系列と呼ばれる細胞の連続性があるのです。ですから、実は細胞に基本プログラムがあって、ゲノムは単に部品の倉庫にすぎないという見方もできるのです。

部品の情報と配線図の情報、これをあわせたのが生命のシステムの情報で、これが本当の意味での生命の設計図です。細胞に書かれたシステムの情報を受け継ぐことが遺伝であり、システムのダイナミックな変化が個体の発生・分化・老化、そして死に至るプロセスです。部品の情報はゲノムに集約された静的な情報ですので、それを解読することは比較的簡単でした。しかし、配線図の情報は分散した動的な情報だと思われる。私どもはこれを分子間相互作用ネットワークの情報として解読しようとしています。生命は地球の上で誕生し進化してきました。生命の設計図をさぐることは、結局自然界と生物界をつなぐ大統一理論をつくることにつながっていくのではないのでしょうか。 (10月28日講演)

チンパンジーのこころをさぐる 母子のきずなとあかちゃんの発達

霊長類研究所助教授 友 永 雅 己

これまで私は約15年間チンパンジーの認識能力の研究を行ってきました。この春、私の勤務する霊長類研究所では、17年ぶりにチンパンジーの赤ちゃんが生まれました。それも3頭もです。この3頭の赤ちゃんを対象に、チンパンジーの比較発達研究がスタートしました。

チンパンジーは、現生の動物の中では私たちヒトに最も近いといわれています。DNAの違いを比べ

てみるとわずかに数パーセントの違いしかありません。しかし、ヒトとチンパンジーの間には明らかな相違点が厳然として存在します。私は彼らが世界をどのように認識しているかという問いを發することによって、彼らのこころのどこが私たちと似ていてどこが違うのかを探ってきたといっただけでいいでしょう。

動物にも「こころ」があるか？この問いに否と答

える研究者は最近では少なくなってきました。われわれヒトという存在が気の遠くなるような長い年月をかけた進化の産物である以上、私たちのこころも進化の産物であるといつてよいでしょう。であるならば、私たちと近縁な動物にも私たちとまったく同じとはいわないまでも、何らかの形でこころというものがあるはずで、ヒトとチンパンジーの認識能力を比較することによって、チンパンジーのこころをさぐり、さらにそこから、今から約500万年くらい前に別々の道を歩みだしたといわれているヒトとチンパンジーの共通祖先が持っていたであろうこころの世界を探ろうというのが、私たちの目指す学問、「比較認知科学」であるといつてよいでしょう。

この春から夏にかけて生まれた3頭のあかちゃんチンパンジー（アユム君、クレオちゃん、パルちゃんといいます）はみな、母親チンパンジー（アイ、クロエ、パン）が無事に抱いて育てています。しかし、飼育下のチンパンジーがうまく子育てできないことは思った以上に高い確率で出現します。特に、飼育下で生まれ育ち、他のチンパンジーが子育てを

しているところを見たことがないチンパンジーでは特にその危険性が高くなることが知られています。今回の母親たちも実はみな小さいころから飼育下で育ち、他のチンパンジーの子育てを見た経験はほとんどありませんでした。私たちも、今回の相次ぐ出産では、最悪全員が人工哺育になるのでは、という危機感を少なからず抱いていました。そのため、出産前からこれら3人の母親候補に「育児」訓練なるものを行ってきました。具体的には、チンパンジーの赤ちゃんのぬいぐるみを抱かせる、野生チンパンジーの母子の様子をビデオで見せる、テナガザルのこどもを見せる、などです。こういった訓練は、その効果を客観的に見きわめるのがたいへんむずかしいのですが、これらの訓練のときの母親たちの行動、そしてその後の子育ての態度は、まさに「三者三様」といふことがふさわしいものです。

このように個性豊かな母親に育てられていくアユム、クレオ、パル。彼ら自身もまた個性豊かなチンパンジーに育っていくことでしょう。

（10月28日講演）

平成12年度 教育改善推進費（学長裁量経費）による研究課題

本年度の教育改善推進費（学長裁量経費）については、下記の30件が採択されました。採択されたプロジェクト課題及び代表者等は、次のとおりです。

プロジェクト課題	代表者所属・職名・氏名	プロジェクト関連部局
本学における外国語教育の刷新 - 効果のある外国語教育のための自習作業型プログラムの開発と実施	総合人間学部 教授 水光 雅則	総人, 人環, メディア
入学者の多様化に対応した大学のカリキュラム開発	教育学研究科 教授 天野 正輝	教, 高等教育
実務法曹養成教育における法解釈学と基礎法学の連携のあり方に関する総合的研究	法学研究科 教授 田中 成明	法
化学体験学習プログラム	理学研究科 教授 大須賀篤弘	理
先端医療の発展のための臨床病理検討会推進プロジェクト	医学部附属病院 教授 山邊 博彦	医, 病院
先端医療に向けた医療薬学教育システムの整備充実	薬学研究科 教授 橋田 充	薬, 病院
桂キャンパスで始まる京都大学工学研究科の21世紀の挑戦	工学研究科 研究科長 荻野 文丸	工
農学における放射性同位元素等取扱い教育の先端的ビジュアル化	農学研究科 教授 東 順一	農, R I, 食研
環境にやさしい大学生活の推進	環境保全センター 教授 高月 紘	学生部
公開実験授業の実施及び成果の公開	高等教育教授システム開発センター 教授 田中 每実	高等教育

プロジェクト課題	代表者所属・職名・氏名	プロジェクト関連部局
大学授業の参加観察によるFDの組織化	高等教育教授システム開発センター 教授 藤岡 完治	総人, 高等教育, 化研
総合情報メディアセンターのCALL環境の整備に関する研究	総合情報メディアセンター 教授 壇辻 正剛	総人, 文, メディア, 留学セ
自然科学・人間学の教育の体系化：今西錦司生誕百年記念事業	霊長類研究所 教授 松沢 哲郎	総人, 文, 教理, A/A, 東南, 博物館, 人文, 霊長
全学共通科目の学習に必要とする学生用図書及び大学院生の研究を支援する専門参考図書の充実整備	附属図書館 館長 佐々木丞平	全学部
留学生の科目履修のための情報資料提供	附属図書館 館長 佐々木丞平	全学部
Web of Science の試験提供と利用調査	附属図書館 館長 佐々木丞平	全学部
京都大学の諸情報の Web 化に関する検討と実現	総務部 システム管理課 金澤 正憲	総務部, 研究協力部
電子情報媒体による「京都大学紹介(仮称)」の作成	総務部 総務部長 朝倉 信裕	全学
京都大学の校風とヒドゥン・カリキュラムの実証的研究	教育学研究科 教授 竹内 洋	教, 留学セ, 百年史
法科大学院の設置と法学・政治学教育の再編成	法学研究科 教授 中森 喜彦	法
アフリカ地域研究と国際協力 - 大学院教育への活用 -	アジア・アフリカ地域研究研究科 教授 掛谷 誠	A/A
「人間・環境学」の国際的展開	人間・環境学研究科 教授 高橋 義人	総人, 人環, 人文
バイオインフォマティクスの新展開	生命科学研究科 教授 大山 莞爾	理, 情報, 生命
総合博物館インターネット・ホームページ拡充プロジェクト	総合博物館 教授 大野 照文	博物館
行政情報化推進に伴う本学事務情報システムの再構築検討	総務部 総務部長 朝倉 信裕	全学
京都大学所蔵古地図目録・図録集成	文学研究科 教授 金田 章裕	文, 博物館, 図書館
公立図書館での利用者用インターネット端末の問題：ネブラスカ州全州調査	教育学研究科 教授 川崎 良孝	教
放射線基礎教育プログラムの構築	放射性同位元素総合センター センター長 寺島 泰	RI
ギガビットLANの試行による、生物・医学分野における論文用図表作成、公表システムの構築	遺伝子実験施設 施設長 清水 章	理, 医, 生命, 遺伝子, ウイルス
ストック重視型の大学キャンパス施設マネジメントのためのデータ整備とシステム開発	施設部 技術顧問 宗本 順三	工, 施設部

平成12年度学術研究奨励金による研究課題

本年度の学術研究奨励金については、下記の18件（人文・社会系 3 件，理学・工学系 7 件，医学・生物系 8 件）が採択されました。

採択された研究課題及び研究者は、次のとおりです。

【人文・社会】系

研究課題	所属・職・氏名
民事訴訟における証拠開示制度の研究	法学研究科 助教授 笠井 正俊
地方自治体における総合計画の実効性とその評価に関する実証研究	経済学研究科 助教授 松井 啓之
オブジェクト指向・並列プログラミングを用いた大規模経済システムにおける自己組織化・パターン形成に関するシミュレーション分析方法の研究	経済研究所 助教授 森 知也

【理学・工学】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
分子動力学法を用いたコーディエライトのコンピューターシミュレーション	理学研究科 助手 三宅 亮
一軸性圧縮による有機導体の電子物性制御	理学研究科 助手 前里 光彦
活動宇宙の根源としての磁場の物理量を精密に測定する手法の研究開発	理学研究科 助手 上野 悟
富士火山の下におけるマグマと水の溶解条件の実験的解明	理学研究科 助手 川本 竜彦
ヒト尿中に存在する新規ダイオキシン様物質, R1, R3の同定とその特性解析	工学研究科 助手 松田 知成
セルロース繊維分散系の凝集構造と流動特性の制御	農学研究科 助手 巽 大輔
非最小位相系に対する非因果的な反復学習法の開発とそのヘリコプタ制御への適用	情報学研究科 助手 十河 拓也

【医学・生物】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
ノックインマウス系を用いた視物質機能の解析	理学研究科 助手 今井 啓雄
アスピリン喘息に関連するプロスタノイドの解明	医学研究科 助手 小林 拓也
コンディショナルトランスジェニックマウスの作製によるCOX-2の腸管上皮に及ぼす影響の研究	医学研究科 助教授 大島 正伸
新規インスリン分泌促進薬の膵細胞K _{ATP} チャンネルにおける結合部位の同定, 及び薬剤特性の検討	医学部附属病院 助手 長嶋 一昭
細胞膜裏打ち蛋白質ピネキシンの機能解析による細胞の足場依存的増殖メカニズムの解明	農学研究科 助手 木岡 紀幸
神経細胞におけるRhoファミリーG蛋白質の機能及びその作用機序の解析	生命科学研究科 助手 加藤 裕教
小胞内にプールされる亜鉛の生理機能の解明	生命科学研究科 助手 神戸 大朋
多様な機能を持つ7回膜貫通型カドヘリン: 分子内ドメインの機能解析	ウイルス研究所 助手 碓井 理夫

平成12年度学術出版助成金による研究課題

本年度の学術出版助成金については, 下記の2件が採択されました。

採択された研究課題及び研究者は, 次のとおりです。

【人文・社会】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
『先史の観念』(翻訳)	文学研究科 助手 富井 眞

【医学・生物】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
久保田競博士論文選集	霊長類研究所 助手 中村 克樹

話題

総合人間学部正門ほか3棟が文化財に登録

このたび、総合人間学部正門，同学部門衛所，本部構内正門及び人文科学研究所附属漢字情報研究センターが，11月6日付けで文化財保護法第56条の2第1項の規定により文化財に登録された。

なお，本学においてはすでに理学部附属地球熱学研究施設ほか5棟が文化財に登録されている。

総合人間学部正門（明治30年建築）

三高吉田学舎が京都帝国大学に譲渡されるに伴い，新三高キャンパスの正門として建設。木造門柱の両脇に，通用門が付く。大門柱の礎石部と木製柱身部が追掛大柱継ぎで結合される点に特徴があり，門扉は上棧をアーチ状とし，全体で和洋が混在したデザインである。門衛所と共に真水英夫氏の設計と伝えられる。

総合人間学部門衛所（明治30年建築）

上記の総合人間学部正門と同時に建設。木造，鉄板葺，ドイツ下見の平屋建。東面の受付部を八角屋根状に造り，居室部の切妻屋根と組み合わせている。

本部構内正門（明治26年建築）

本部キャンパスの中枢をなす正門。第三高等中学校正門として建設。本部構内で初期の建造物である。門柱は石面と擬石面を交互に重ね，背面に大きな控えをとる。門柱の左右に石造袖堀を付け，西側に通用口を設けている。設計は山口半六氏と久留正道氏。

人文科学研究所附属漢字情報研究センター

（昭和5年建築）

外務省東方文化学院京都研究所として建設。鉄筋コンクリート造，外壁スタッコ仕上で，塔付2階建の西棟と平屋建の他棟が中庭を囲み口字形平面を構成する。スパニッシュ・ミッション様式を基調に外観・内装ともに高密度のデザインが施されている。設計は武田五一氏と東畑謙三氏。

文化財登録建築物（本学関係分）

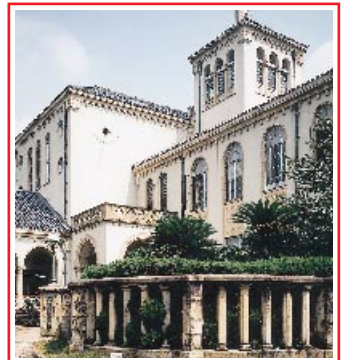
登録年月日	建築物名称	建築年	所在地（構内）
平成9年6月12日	理学部附属地球熱学研究施設	T13	大分県別府市野口原
平成10年7月23日	楽友会館	T14	（総合人間学部構内）
〃	農学部表門及び門衛所	T13	（北部構内）
平成10年9月2日	尊攘堂	M36	（本部構内）
〃	文学部陳列館	T3	（本部構内）
〃	農学部附属演習林旧本部事務室	S6	（北部構内）
平成12年11月6日	総合人間学部正門	M30	（総合人間学部構内）
〃	総合人間学部門衛所	M30	（総合人間学部構内）
〃	本部構内正門	M26	（本部構内）
〃	人文科学研究所附属漢字情報研究センター	S5	左京区北白川東小倉町



農学部附属演習林旧本部事務室



理学部附属地球熱学研究施設



人文科学研究所
附属漢字情報研究センター



文学部陳列館



農学部表門及び門衛所



尊攘堂



楽友会館



本部構内正門



総合人間学部正門



総合人間学部門衛所

今回登録した建造物

公開シンポジウム「トラウマと心のケア」の開催

カウンセリングセンターと保健管理センターの共催により、「心」の問題を取り上げる公開シンポジウム「トラウマと心のケア」が、10月17日（火）午後1時30分から、薬学部記念講堂において約100人が参加して開催された。

シンポジウムは、宮崎 昭副学長ならびに岡田康伸カウンセリングセンター長の挨拶にはじまり、小西聖子武蔵野女子大学人間関係学部教授と伊藤良子教育学研究科教授の講演があった。

小西教授の「トラウマの治療と被害者援助」と題する講演では、実際の被害者の心理やその対応について話された。また、伊藤教授の講演「フロイトのトラウマ論の今日的意義」は、理論的な面から治療論を深めたものであり、興味深いものであった。その後、参加者からさまざまな質問があり、充実したシンポジウムとなった。

（カウンセリングセンター・保健管理センター）

お知らせ

「白馬山の家」の冬季開設

本学の学生及び教職員の厚生施設である「白馬山の家」を、今冬については下記のとおり開設しますので、ご利用ください。

この「山の家」は、中部山岳国立公園白馬山麓の梅池高原にあり、雄大な北アルプスの峰々に囲まれ、積雪量も多く、雪質の良さとともにスキーには絶好の条件を備えており、初心者向きから上級者向きまで各種のゲレンデがあります。

建物は山小屋風の木造地上2階、地下1階建てで、間取りは1階が食堂兼談話室、2階が寝室、地階が浴室、乾燥室等からなっています。

なお、昨年の秋に、屋根、外壁等を修理し、装いも新たになりましたので、是非、ご利用ください。

記

1. 名称 京都大学^{はくば}白馬山の家（電話 0261-83-2405）
2. 所在地 長野県^{あずみ}北安曇郡^{おたり}小谷村^{ちくに}大字千国字柳久保乙869の2
（交通機関）
JR 大系線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「^{おや}親の^{はら}原」下車、徒歩約20分
3. 開設期間 12月20日（水）～1月10日（水）並びに2月20日（火）～4月10日（火）
4. 収容人員 26人
5. 所要経費 1人1泊 使用料120円、ほかに食費、暖房費等実費
6. 申込み及び利用に関する詳細は、体育会事務室（総合体育館内、電話学内2574）に照会してください。
7. その他 当施設には、駐車場がないため、自動車での利用は避けてください。

学生証のIDカード化について

平成13年4月1日から、証明書自動発行機等の利便性向上のため、学生証をプラスチック製IDカードに変更します。

については、現在発行している学生証から新学生証への切り換えを、全対象学生一斉に実施しますので下記により手続きしてください。

記

1. 対象者 学部学生・大学院学生・医療技術短期大学部学生
①最終学年に在籍する者は除く。
②理学研究科，工学研究科，エネルギー科学研究科及び情報学研究科の博士後期課程に在籍する平成10年10月入学者については対象となります。
2. 提出書類 顔写真1枚（個人別写真台紙の所定欄に貼付のうえ提出）
（文学部・文学研究科については、顔写真を教務掛に持参すること。）
①単身脱帽正面向
②大きさ 縦3.0cm×横2.4cm
③光沢仕上げ，カラー写真可
④写真裏面に氏名・学生番号を記入
3. 提出先 所属学部・研究科の教務担当掛
ただし，工学部・工学研究科については，学科・専攻事務室教務担当に提出
4. 提出期限 平成12年12月22日（金）
5. 留意事項等
 - 1) 附属図書館，総合情報メディアセンターの入退館システム等が現在のバーコード（利用者番号）読み取り方式から磁気データ（学生番号）読み取り方式に変更となります。
 - 2) 証明書自動発行機は，現在の学生ID番号（10桁）の直接入力方式から学生証の磁気データ（学生番号）読み取り方式に変更となり，パスワード（4桁）入力のみで利用できます。
 - 3) 平成13年4月1日以降は，新学生証を持っていない場合は，附属図書館，総合情報メディアセンター，証明書自動発行機の利用が出来なくなりますので，必ず切り換え手続きを済ませてください。
 - 4) 新学生証発行後の紛失等による再発行申請に際しては，今回の切り換え手続き時に提出された個人別写真台紙により作成するため，新たな写真の提出は不用となります。
 - 5) 今回は，平成13年4月1日時点において在籍が確実な者を対象としています。
最終学年在籍者で，平成13年4月1日以降も在籍することとなる場合の手続き時期は，別途連絡します。
 - 6) 各学部・研究科における新学生証の交付手続き等については，所属の教務担当掛から別途連絡します。
 - 7) 問い合わせ先 所属学部・研究科の教務担当掛